

早稲田大学審査学位論文  
博士（人間科学）  
概要書

小児気管支喘息患者を対象とした  
テイラー化教育プログラムの開発および効果の検証

Development of a Tailored Education Program  
for Pediatric Asthma Patients

2013年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科  
飯尾 美沙  
Misa, Iio

研究指導教員：竹中 晃二 教授

わが国においては、生活環境や疾病構造の急激な変化によって、子どもの3割が何らかのアレルギー疾患を有しており、なかでも小児気管支喘息（以下、小児喘息とする）は、有病率が最も高く、長期的な治療・管理が必要な疾患である。本研究では、小児喘息のコントロール状態を改善・維持するための管理行動の継続を目的とした患者教育について、2つの課題に焦点をあてて研究を行っている。ひとつは、小児喘息管理行動の継続において重要な心理的変数（セルフ・エフィカシー **Self-Efficacy**；以下、**SE**とする）を評価する尺度の開発である。もうひとつは、小児喘息の管理行動の継続を目的とした患者教育プログラムの開発である。その教育効果の検証には、開発した尺度を含む様々な指標を用いている。本研究においては、患者教育の対象を、1)学童期以降にある喘息患児、および2)乳幼児喘息患児を養育する保護者、の2群に分け、それぞれに対応した研究を行った上で、それらを融合している。

1章では、本研究に関連する従来の研究を詳細に概観し、さらに本研究の意義および目的を述べている。

2章においては、学童期および思春期喘息患児を対象に、効果的な患者教育を提供するための教育手法、および教育内容について検討している。まず、研究Ⅰ-1では、小児喘息の長期管理に対する患児用 **SE** 尺度 (**CASES**) を開発し、喘息患児の長期管理に果たす **SE** の役割を明らかにしている。その結果、喘息患児の長期管理に対する **SE** は、喘息管理の負担感、および喘息コントロール状態を予測する役割を担う変数となっていた。研究Ⅰ-2では、プログラム開発の基礎調査として、学童期喘息患児の長期管理行動に影響を与える要因を明らかにしている。その結果、認知的要因、環境要因、および行動（吸入ステロイド薬、内服）要因が、患児の長期管理行動に大きな影響を与えていた。その後、研究Ⅰ-3において、研究Ⅰ-2で明らかにした影響要因を基に、社会的認知理論の構成概念を適用させたテイラー化教育プログラムの開発し、さらに研究Ⅰ-4において、このプログラムの教育効果をランダム化比較試験で検討している。その結果、テイラー化教育プログラムを実施した介入群、および喘息パンフレットを配布した統制群ともに、喘息管理負担感の低減、喘息知識の増加、および小児用健康統制位置尺度の「他者統制」に改善が認められた。テイラー化教育プログラムは、患児にとって受け入れやすく、楽しく学べるものであり、喘息患児に対する新たな患者教育ツールとしての使用可能性が示唆された。

3章においては、乳幼児の喘息患児を養育する保護者を対象とした教育手法、および教育内容について検討している。研究Ⅱ-1では、

小児喘息長期管理に対する保護者用 SE 尺度(P-CASES)を開発し、保護者の長期管理に果たす SE の役割を明らかにしている。保護者の長期管理に対する SE は、喘息管理の負担感、および子どもの喘息コントロール状態を予測する変数であった。研究Ⅱ-2では、プログラム開発の基礎調査として、乳幼児喘息患児を養育する保護者の長期管理行動に影響を与える要因を明らかにしている。その結果、認知的要因、環境要因、社会的要因、経済的要因、身体的要因、行動要因（ステロイド吸入薬、内服薬、環境整備）が、保護者における長期管理行動の影響要因であった。さらに、研究Ⅱ-3では、研究Ⅱ-2で明らかにした影響要因を基に、保護者用テイラー化教育プログラム開発を行い、研究Ⅱ-4では、このプログラムの教育効果をランダム化比較試験によって検証している。その結果、保護者用テイラー化教育プログラムを実施した介入群、および喘息パンフレットを配布した統制群ともに、喘息コントロール状態の改善、喘息養育者 Quality of Life 尺度の「治療薬不安」および「発作不安」の改善、および P-CASES の環境整備行動得点の増加が認められた。テイラー化教育プログラムは、保護者にとって受け入れやすく、喘息管理の重要性を再認識させる新たな患者教育ツールとしての使用可能性が示唆された。

4章では、2章および3章より得られた知見を総括している。それらは、1)開発した CASES、および P-CASES は、患者教育研究における評価指標として有用であること、2)小児喘息管理には、認知、行動、環境、社会、および経済という多様な要因が影響していること、3)開発したテイラー化教育プログラムは、医療現場において実用可能であること、4)テイラー化教育プログラムは、従来の患者教育と同等の効果があること、および5)タッチパネル式コンピュータを用いた患者教育は、患児および保護者にとって受け入れやすく、新たな教育ツールとして使用可能であること、が挙げられていた。

以上、本研究の知見から、患児および保護者への患者教育において、長期管理を見据えた行動科学的アプローチを新たに患者教育ツールとして提供できる可能性が示された。本研究は、小児喘息患者教育の効果を行動科学的観点によってランダム化比較試験を実施したわが国初の研究である。今後は、本研究の知見が医療機関に限らず、地域や学校、保育所・幼稚園、および家庭において広く活用されることが期待される。